

6. 性 指 導

1. 性指導をとりあげたのは

子ども達の会話の中に、「〇〇君 エッチなこと言うわ」「あの子かっこいいから、あたし好きよ。」「〇〇君の好きな子 あたし知っとるわ。」など、性に関する言葉を時々耳にする。

思春期を迎えれば、異性を意識する感情は、障害の有無とはかかわりのないことである。強いて健常児との違いをいえば、障害児は、その感情を直接的にことばや行動に出すくらいのことであろう。ですから教師は、この感情をまず肯定するところから出発しなければならない。

性教育の必要は、誰もが認めつつも、教師間の意見交換が難しく、その上、子ども達の個人差もあって、難しかったのである。もちろんケースバイケースの指導はなされてきたわけであるが、子ども達の成長と発達に対応する組織的な指導にまでは手が届かなかったのである。しかるに近年、指導の態勢がととのい、生活指導として日常の生活の中では勿論のこと、生活科も含めた教科の中でも、性教育が考えられ、生命の尊さ、自分や友達への愛情、あるいは、男女が互いにその違いを正しく理解して協力してゆくことの大切さが取り上げられるようになってきたわけである。

どの子にも性にかかわる悩みはある、従って良き相談相手が必ず必要である。そして性感情は理解され肯定されるにしても、その表現には多くの社会的な制約がある。いわゆるマナーである。マナーは、いろいろな場で、いろいろな形でのトレーニングによらなければ身につかないものである。

男と女の人間的な美しいかかわりあいも、こうした中に育つものであろう。

今年度は性教育を分科会の一つに取り上げ、学校としての指導態勢を整えた。必要な時に必要な指導がなされるようにとの狙いからである。

学級担任、養護教諭、医師・父母、あるいは、この指導にかかわる誰もが、相談をもち込める場、情報交換の場として、この研究グループが機能するよう求められている。

(伊 藤 泰 彦)

2. 児童・生徒の実態

(1) 日常生活の中から（性に関するつぶやきや性行動）

子ども達の性的芽ばえや関心は実に個人差が大きく、自分自身の体の成長や変化に対する理解も多様である。一人ひとりさまざまではあるが、性の誤った文化やまちがった偏見にふりまわされる前に、正しい知識を理解し、子ども達が不安がったり悩まないように、あたりまえの人としての性を楽しみ、成長して行ってほしいと考える。子ども達が困った時に、必要なことを必要なだけ指導したいと考えるのである。このように考えると、尚のこと、子ど

も達が日常生活の中で何を知りたがっているのか、何が不安なのか、何をどこまで知っているのか、どんな性文化の中で生きているのか、彼等を取りまく性環境はどうか、いろいろな情報を収集し、実態を把握しなければならない。

日常生活の中で子ども達のつぶやきや行動をひろってみると次のようである。

◦ 小学部

- 胸やおしりにタッチする
- 性器をこすりつけている。触っている
- 気にいらないことがあるとチンチンを出して触る
- ペニスを出しながらトイレに行く
- ペニスがつまめずファスナーをおろして排尿できないということで、排尿自立に向けて改良パンツでトイレトレーニングをした（学級で）

◦ 中学部

- 性器を直接出して授業中に勃起させている
- 男女生徒がベタベタくっついている
- 「先生チューしたらだめか」「テレビならいいですか」
- 性器に直接、手を入れて触ってにおいをかいでいる。できるだけ手を入れにくくということでボディースーツを着用させ手を入れにくくするも生理時にはナプキンに抵抗があり学担はこれで頭を痛めている。
- 教室で自分の性毛をはさみで切っている。

◦ 高等部

- 街の人、観光客にボディタッチをする
- 「生理になったあ」と大きい声で言う
- 女の先生に関心を持ち、校内をつぶやきまわる（休み時間・給食時間になると終始、小学部の教室に入ってきてクラスの子が落ちつかず）
- トイレのエチケットボックスのふたに生理血で手型をつけてある
- 「先生、だんなさんとセックスしたん」

◦ 卒業生

- 結婚したい、誰かいい人いませんか（体がたまらないという）
- 恋人がほしい、好きな人がいないどうしたらよい？
- 性毛をかみそりで切って、ペニスに傷をつける
- 結婚した例

◦ 親から

- 小さい時は耳たぶをさわった、最近は自分の布団の中でペニスをさわっている。くせにならないか（8才）

- ・ 布団でのそい寝をしたがるがどんなものか、性器は成長してきている（11才）
- ・ 深夜放送のテレビをいつまでも見ている（卒業生）
- ・ 娘はあのようにうとい、性の不安がある不妊手術が必要ないだろうか（高）
- ・ 男の子かって心配や、中学の時、ひっぱり出されていじめられた
- ・ 理科の授業のことを家で話をする。男の子のあれはペニスで女の子の生理は膣から出てくる。（高）

(2) 親との話し合いから

- ・ 従来、興味があったわけではない、さけて通れない問題である。
- ・ 子ども達のマスタベーションをあたりまえにとらえてほしい。
- ・ 息子に男性的な特徴が出てきた、父親不在で息子の勃起に驚かされた、男性の性を学習したい。障害児の性も同じであることを痛感した。
- ・ 性の問題が早く来るからとかまえていたが遅かった（小6）
結婚したいです。結婚することはどういうことやとたずねたら、だきつくんやと答えた。チンチンの洗いかたから父親がかかわっている。自分も楽しく、人に迷惑をかけないように成長してほしいと願っている。『父親へのメッセージ』というようなものを学校側で指導してはどうか。
- ・ まだ生理がはじまらない（中1）
小4年の時からかまえて気にしてきた母であるが恥ずかしいことがわかっていない。トイレは開けっぱなしで恥ずかしい恥ずかしいといっている娘である。級友の男の子にベタベタ、だんだん大きくなり外でするようにになると困るから気になる。
- ・ 学校内で性の問題が以前はあった。いたずらしたとか、こっそりかくれて体をさわったケースである。深いものではなかったが高等部ではこれまで、「いたずらをしない」「暴力をふるわない」「物を盗らない」といったことを予防的に指導してきたが意図的に教えるのは非常にむずかしい。性教育を自然な形で性について気軽に話しあえる場づくりを考えていきたい。学校ぐるみで、学校全体で性の指導をとりあげたこと、大きい子が小さい子のめんどうをみたり、男女手をつないだりして学習活動をするのはいいことだ。
- ・ 性教育はこれまで暗やみであった。人ごとではない自分のことである。個人差がある。必要な時に必要なことを必要なだけ話してやろう。
- ・ それぞれに悩みがある。悩みや不安をのりこえて今日がある。不安や悩みを話し合える関係になりたい。

3. 指導の実際

(1) 学習活動からの記録

性の指導を系統的に組織的に意図して実践してきたわけではない。初潮指導・生理の指導からの出発であった。子ども達の生活の自立をめざして、毎日のトイレ指導や着脱指導の中でその子らしさを認めながら性の表現・つぶやきを受け入れ、性にはプライベートなもの、マナーや恥じらいがあることを感じとらせたいと考えてきた。

性教育は学級指導や保健指導などの授業の特設時間になされるだけでなく、日常生活の中でこそ指導されるものであると考えるが、手さぐりながら、授業としてとりあげたことから、子ども達の表情などをここに記録する。

① 毎月の誕生会（小学部）

その月生まれの子どもの成長を祝いあうとともに、その家族のつながりや生命の大切さなどにふれる。おかあさんに来校していただいてお話を聞いたこともありました。「とても静かでおとなしく、育てやすい子でした。おっぱいをもっと吸ってほしかったです。歩き始めたとき、とてもうれ



しかったです。はじめて言ったことばは“まんま”でした。大きくなっても、すなおでやさしい子でいてほしいです。いまのままがいちばんいいです。」お母さんの願い通りやさしくって、すなおなH男くんです。愛情いっぱいに育てている様子が伝わってきます。他のお友だちも、きっとお母さんが恋しくなったろうと思います。今日、小さかった頃の写真を見ながら、そのころのことをお話してみてもいいですか。（学級通信から）

（花本 ヨシエ）

② 生活の授業（中学部2年）

「K先生に男の赤ちゃんが生まれました。」と子どもたちに伝えた。すると、「なんて名前や?」「K先生いつくるが?」「赤ちゃん見に行きたい。」と大きわざである。

このクラスは男子3名、女子4名、計7名で構成され、約半数が自閉的傾向を示している。友だち同士のかかわりは、やや一方的ではあるが、比較的活発であり、クラス意識も芽ばえてきている。

昨年度は『私の誕生』ということで、幼い頃の写真を持ち寄り、誕生までの話や家族の愛情に包まれて育ってきたことなどを学習した。そして今年度、たまたま副担（K教諭）が9月から産休にはいり、だんだん大きくなるお腹を身近かに見てきたこともあって、赤ちゃんに対する思いが育っている。

特にT子は、その思いが強く、『赤ちゃんの話』（マリー・ホール・エッツ作 坪井郁

美訳 福音館書店)が大好きで、何度も家に持ちかえり、「K先生の赤ちゃんもだんだん大きくなるといいなあー。」という感想をよせている。さらにその思いは、自分の家族へと発展し、校内意見発表会では、クラス代表として右のような発表を行なった。

そこで、このK教諭の出産を機会に、他の子どもたちの思いもひき出してみようと考え、“おめでとう”の手紙を書かせることにした。まず、実物大の赤ちゃん人形を登場させ、泣き声のテープを流す。察しのよい子どもから、「あっ、K先生の赤ちゃんや。」「泣いとる。」「K先生どうしてるかな?」「赤ちゃんは何してるかね?」などと話をしながら一人ひとりに赤ちゃん人形を抱かせた。人形を乱暴に扱う子など一人もいない。どの子ども、とても穏やかな表情で抱いてくれた。

また、3人の子どものお父さんである担任のH教諭は、初めての子が産まれる時病院で長い間待っていたこと、そして「女の人は赤ちゃんがお腹にいるときからお母さんになっているけど、男の人は生まれてからだんだんお父さんになっていくみたいです。」と子どもたちに話してくれた。こうして手紙を書いた。以下にその一部を紹介する。

私のお父さん

お父さんは、まいにち、おしごとへ行っています。おさけもたっぷりのみます。たべすぎて大きなおなかをしています。

私にワープロをおしえてくれます。お友だちの名まえをうつれんしゅうもしました。

お父さんは、ときどき、おこります。「T子、たべすぎ、おかしとおかず、だめ。」といます。

でも私は、お父さんが大好きです。

赤ちゃんがうまれました。
赤ちゃんは、元気です。
かわいいです。
おんぶをします。 (H夫)

赤ちゃん えんえん 泣いている。
けんかをしてませんか。
おっぱいのむ。 ゴックンとのんんでいる。
(F子)

赤ちゃんの声がききたいな。
なまえをおしえてください。
赤ちゃん かわいいね。
よかったね。 (K男)

あかちゃん かわいい
あかちゃん だっこ
(S子)

おむつしてる。
さわりたい。
おとこの子
おっぱいのんんでいる
(A子)

男の子の赤ちゃんはかわいいです。
赤ちゃんは病院にいつている。
お家にねてる。
おもたい。 (M夫)

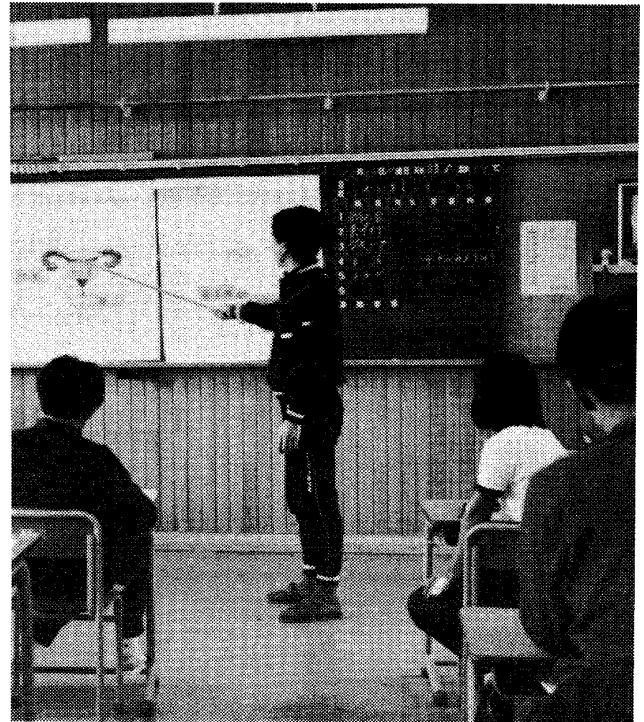
赤ちゃんさわりたいです。
学校 赤ちゃんつれてきてください。
おんぶしたいです。 (T子)

どの手紙にも、その子らしさがでており、K教諭とまだ見たことのない赤ちゃんへの愛情が感じられた。子どもたちにとって、これまで、愛情は与えられるものが中心であった。しかし、これからは、母と子、家族とのつながりを軸に、与える愛情、人を思う心が育ってほしいと願っている。

(松村佳恵)

③ 理科の授業 (高High グループ)

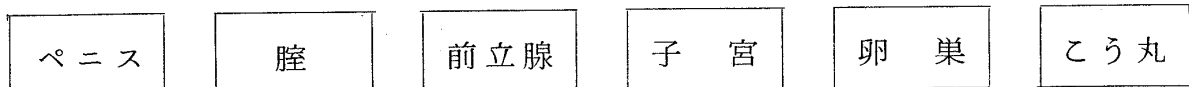
「生殖のしくみ」という学習の2時間目であり生徒の中には相当な期待感をもってむかえた者もいた。休み時間に「さあ次は理科の勉強や。楽しみやなあ。」という言葉がそれをあらわしていた。このような期待感はともすれば生徒の興味本位に流され、「からかい」も生じかねない。そこで、授業の最初は「これからは大切な勉強をするんだぞ。」という姿勢を指導者自身があらわすことにつとめた。指導者自身も「生殖のしくみ」について前の時間に1時間経験していることから生徒の反応もある程度つかめるようになりより落ちついて授業にのぞめたように思える。



さて、導入の部分では前時の学習を簡単にふりかえることにした。

はじめに、ゆっくりと「生殖のしくみ」と板書した。「さあ、読める人。」ということで2~3人の手があがった。しかし、読みの方は「セイチョク」「ウミチョク」といったこたえで正解はなかなかでなかった。「この字が読めなかったら、次には進めないよ。」とこちらから言うと、生徒の方もやっきになっていろいろに読むがやはり正解はでない。前時に学習していたのであるが、読みそのものが難解なようである。ヒントを与えたところで正解がでて、ここで大きな拍手。

さらに前時に学習したカードを活用して、生殖器について話し合うことにした。使用したカードは次の6枚である。



これらのカードにはすべて読みがなをつけておいたがはじめはその部分をかくして示してみた。やはり難解とみえて読めるものが少なかったといえる。読みは難解であったよう

であるが、生殖器についてはヒントによりいくつかわかるものもあった。すべて黒板にはったところで「わたしたちのからだにある大切なものだから名まえもしっかりおぼえておこうね」としめくり全員で1つひとつ読みあげた。次に、「では、ここにある名まえのものは、男の人にも女の人にも全部ありますか。」と発問したところ、「あるわけないよ。」とかえってきた。そこで男女別にわくをつくり分類させることとした。

女子生徒が挙手をおこないこの分類をおこなった。短時間でカードを分類し、しかも正解であった。生徒全員に確かめたうえで前時に使った男女別の生殖器の絵図を示すこととした。

はじめは男の生殖器からである。カードをそれぞれのところに置き、それらのはたらきについて説明を加えた。前方からの図はややわかりにくそうなので側面の図を板書したうえで「白いねばねばしたもの」がでてくことや、この中に「赤ちゃんをつくるもと」があることの説明をおこなった。「赤ちゃんをつくるもと」である精子についてはマグネットシートでつくった模型を使い、それを実際に絵図の中で動かした。

そして、次に女の生殖器である。「赤ちゃんのもと」である卵子について話し、「それがとびだしてくると、赤ちゃんを育てるへや（子宮）では、いつ赤ちゃんになってもよいように血液や栄養を準備してまっています。赤ちゃんにならずに体の外へ出た時は、血液や栄養も外へ出てしまいます。」ということで「生理」（月経）の説明も加えた。「生理」という言葉が出ると「僕、辞典で調べたよ。」という男子生徒がいたが、やはり日常的に使われている言葉を耳にして関心をもっていったようである。

このようにそれぞれの生殖器についてふれたあと、受精ということに話をすすめた。精子と卵子の模型を動かし、「ドッキング」する段になると、男子生徒の中には妊娠とうけとめて「ゲボッ」と吐き気のまねをしていた。

以上のように展開したうえで赤ちゃんをうむには男と女が必要であることを確認し、次の時間は赤ちゃんが育っていく様子を学習することを告げた。

学習全体を通してみると、真面目に学習が展開できたように思える。日常的には茶かすことを得意とする生徒に対して授業の後「どうだ。わかったか。」と問いかけると「はい。よくわかりました。」と素直に、しかも真剣味をおびた返事がかえってきた。

（安田茂章）

④ 国語の授業（高等部）

「本の読み聞かせ」 題名『こんやおつきみ』 谷 真介作 北田卓史 絵

（金の星社）

“赤ちゃんが生まれる”という社会的意識にまで広がった

読み聞かせの授業では全員が意欲をもって聞くという、私にとっては話しやすく良いクラスである。どの生徒もその子なりによく考え、ありのままに話す。この作品をとり

あげたのは、9月の満月の近くでもあり、お月見という行事を大切に受けとめさせたい、そして、生徒たちも家族でお月見をし、満月の美しさを味わってほしいと思ったからである。

読み始めのうちはなんだか幼稚っぽいなあという思いで見ている生徒もあったが、次の場面で意外な話が出た。

マキちゃんのお父さんがタクシーの運転手としてお客さんを乗せている中で、若い男の人がお腹の大きな奥さんの手をひいてきて、「生まれるんです。大至急、病院までたのみます」というページのところを読み聞かせていたら、いつもよく発言する高3年のU子が突然話をしだした。

「先生、その女の人、陣痛がはじまったのですね。病院へ行ったら、分娩室へ入るのですね」彼女は高等部では知能の高い生徒であり社会的な常識といったことはよく話をする。だが、いつ、どこで、このような言葉を知ったのだろうか。養護学校へ来ている生徒達には全く知らないものと思っていたのに。他の8名の生徒は陣痛や分娩室という言葉は知らないといった感じだった。私は静かな口調で尋ねた。「Uさん、あなたは赤ちゃんが生まれる時の陣痛とか分娩室とかいう言葉は誰かに教えてもらったの」「いいえ、ちょっと聞いたことがあるだけです」

私はここで、この言葉を取りあげずに次のページの読み聞かせへすすもうと思ったが、このクラスの生徒達には簡単に話しておく機会だと思い生徒達の顔を見ながら話をすることにした。「陣痛というのはね、お腹の中の赤ちゃんがもう出ますよという知らせで、お母さんのお腹の下の方が時々きゅっと痛くなるの。その痛くなることを陣痛というの。分娩室というのは赤ちゃんが生まれる時に入る部屋のことです」U子は、(うん、うん、そうだ) というように、時々にっこりうなずいていた。

ところが、この話をした後、いつも素直に考えたり疑問をもつ高2年のH男が、「先生 どうして赤ちゃんってできるのかね」と聞いた。H男の質問で社会的な事件などのおしゃべり好きな高2年のK男や高1年のY子もさも聞いたような顔つきでいた。私はためらいもせず、はっきり言った。「それはね、仲良く結婚したら、赤ちゃんができるんですよ」とすかさずU子が言う。「結婚しても赤ちゃん生まれん人もおるがいね」「そんな人もいるけれど、その人はどこか体が悪いので、お医者さんにみてもらって治せば、赤ちゃんができますよ」「でも先生、結婚せんでも赤ちゃんが生まれることあるね」とK男。「それはね、2人の間で何か事情があったのでしょう。その人たちもいずれは結婚すると思いますよ」

もうこれ以上、このような話を広げたくないと思い次のページを読み始めた。この本を読み終って少しばかり感想を話し合ってお月見をするよさを受けとめさせた。その後、私はさきほど質問をした生徒の方を見ながらつけ加えた。「あなた達は、不思議に思っていることをよく話してくれて、ほんとうによかったです。きょうは簡単にしか言えませんが

したが、いつか時間のあった時にいろいろ話してあげたいと思います。保健の先生にもお話しておきますからね」と。

〈指導しての感想〉

この絵本から、結婚や出産にまで話が広がるとは思わなかった。でも高校生としてこのような疑問をもつのはあたりまえのことだろう。驚きをもつ私の方がおかしいのかもしれない。養護学校の生徒はこのようなことに興味をもっていないだろうと思っていた私は全く反省させられた。また、身体的なことでの指導は保健や理科という教科の時のみに限らず、生徒からの質問の場において話し合える教師になっていなければならないと、あらためて思った。

(勝 尾 外美子)

⑤ 保健の授業 (中学部 2 年)

「ぼくの体、わたしの体」の授業展開

赤ちゃん人形 (新生児大) をもとに男の子の赤ちゃんかな、女の子の赤ちゃんかな？ ぼくの体、わたしの体を意識させ、それぞれが男の子、女の子であることを確認し子どもから、先生やお父さんお母さん達のように大人の体に近づいていることを気づかせる。そして年老いていくことを知らせる。また成長には個人差があることを知り、友達に対して関心をもたせる。

T : みんなとクラスの先生とそして先生と、他にもう一人仲間に入れてね。

※ 周りをきょろきょろする子の眼を意識

しながら赤ちゃん人形を登場させ一人ひとりだかせる。赤ちゃん人形を見るなり M 子は「かわいい！」言葉のない S 君はジロジロみつめていた。どうも緊張して照れくさそうな子、われものを持つようにだっこしました。

T : この赤ちゃん男の子かな女の子かな

S : 「わからん！」とブスッと答える W 君

それではと赤ちゃんの衣服やおむつをおもむろにはずしてはだかにして見せる。

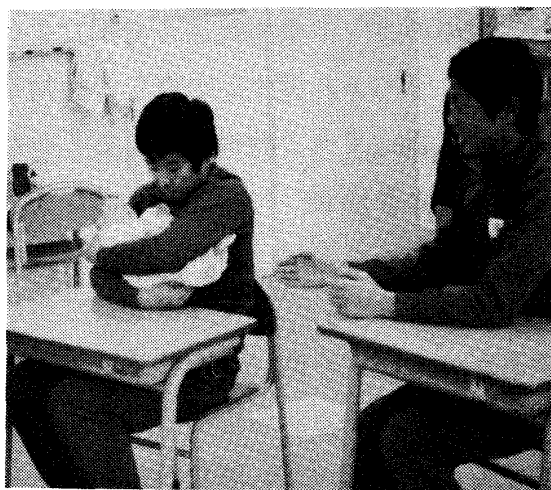
S : 「おとこや！」表情やわらぐ W 君

S : 「おとこや！」と F 君

S : 「おとこや！」と T 君、「おんなや」 M 子 (はだかん坊の赤ちゃんはじめて？)

※ 次は OHP で男女の赤ちゃんのはだかをみました。

T : 「これなあに！」 N 君は「チンチン」といえたが、W 君はいえない。恥ずかしい恥ずかしそうであった。



※M子、チンチンがあるのかないのかわからなく、男女の区別できない、絵には立体感がなかったからでしょうか。

幼児（等身大）の絵から男女を区別、パンツをはかせよう（実物）

T：赤ちゃんから幼稚園、小学生、中学生と大きくなってきたよ、その次は？

S：高等部です。

T：そうですね、それから……大人になるね。

性器、チンチンも大きくなってきましたね。

T：身長・背の高い子も、低い子も、体重の重い子も軽い子もみんな中学2年生ね。

T：毛がはえているかな（性毛やわき毛をさす）

※学担のK教諭、子どもの反応が今一つとみたか、さっとTシャツをぬぎ、子ども達にわき毛を意識づけられた。

子ども達は、自分ののどとK教諭ののどぼとけをさわり、ひげをさわり比較できたよう。

T：おとなになり、20歳ね、次は30歳、先生やお父さん達は30歳、40歳をすぎて50歳ね
50歳、60歳、70歳と年をとっておじいちゃんやおばあちゃんになります。それから

S：死にます。（W君）

〈授業を終えての感想〉

授業の形態がとれなかったり、生徒がパニックをおこすのではないという不安があったが、学担のサポートや生徒達の真剣なまなざしに助けられた。

次回、「赤ちゃん誕生」の授業で教材をかごに入れて出向くと教室に入るなり、子ども達はそばに寄ってきて教材を出してくれたり持ち上げたり興味をしめしてくれ、知りたがっていることを痛感した。赤ちゃんが生まれる頃になると、でんぐり返しをして逆さまになっているとの絵図に“X”のサイン（うそだろう）をしたW君でした。彼の表情がとても印象的であった。「ぼくはどうして男の子なの、ほんとうに男の子？」と呼びかけて性器のちがいの説明を聞いている時、男子生徒はみな、ペニスが固くなっていたという。

知りたがっているから指導しようといった思いもあったが、授業を通して子ども達の性に対する受けとめかた、感じかたがわかったような気がする。

私たちは、障害児の性の指導は大事であるがむずかしいとってきたが、子ども達は、性をどのように受けとめているのかを感じとるためにも、それぞれの立場で、卒直に語り授業にとりくんでいきたいと考える。

⑥ 保健の授業（高等部3年）

「生命の大切さ」

自分がお母さんのお腹にいたころの話、お腹の大きい担任のお話を聞いて、また成長過

程を知ることによって、人はみな大切にされて生まれてくることを理解させたいという願いでとりくんだ教育実習生の指導の中から、生徒の感想や母のメッセージをここに紹介する。

保健の話聞いて

お母さんが私を生む前にいろんなことを苦しんでいました。おなかの中でいつもうごいていました。生まれて歩くのはおそかったです。2才になって歩くようになりました。お母さんがうば車にのせてよくさんぽをしました。生まれた時は小さかったです。食べ物をたくさん食べて大きくなりました。きれいな食べものをがまんして食べました。生まれた時はあまり病気をしませんでした。とても元気な子どもでした。お母さんがおなかの大きい時はうごくのがとてもひどかったと思います。お母さんが私をうんで大きくしてくれてありがとうございます。生まれたときはとてもかわいい子どもでした。

F・M子（高3）

かんそう

べんきょうとてもむずかしかったです。はじめてわかりました。すこしわからなかった。こんなべんきょうをしたのは、はじめてです。またいつか、べんきょうしたいです。

M・M男（高3）

ほけんの話きいて

ぼくはおなかにいる赤ちゃんが何でさかだちをしたしせいでいるのかふしぎでした。山内先生にきいたらなんとなくなかがわかってきました。むずかしかったけれどもべんきょうになったしたのしかった。先生ありがとう。

S・H男（高3）

私がおなかのなかにいたときはお母さんがとてもたいへんでしたね。でも私がでかく大きくなったのはお母さんやお父さんのおかげです。今日、先生のはなしでは、みんなのおかあさんがたがかいてくれた手紙をきいてかんどうしました。みんなのおかあさんがたがとってもたいへんでしたね。教生先生のおはなしをきいてとてもべんきょうになりました。

K・M子（高3）

生命のおとさ

私は4げんめに高Cだけで教生先生といっしょに保健のじぎょうをしました。じぎょうの中身は赤ちゃんのことでした。私はどうしてM子と名づけられたのかは、おとうさんから聞いたことがあったのです。私はおかあさんにかんしゃしたいと思います。だっておかあさんのおなかにいなかったらきっと私はうまれなかったとおもうのです。これから仕事にがんばりたいです。

Y・M子（高3）

お母さんからの手紙

母さんだからつらかったなんて思わない。母さんになれた事。〇〇さんの母さんになれたことに感謝しているのです。初めて歩いた時のこと
父さんと母さんの間を夜歩いて見せてくれた!! あの時のアスファルトの熱さ、暖かい涙を共に思い出す、ありがとう
限りなき前進へ!!

(2) これまでの指導から

子ども達の性の表情や手さぐりの性指導について記してきたが、日ごろにおいて私たちや保護者は性指導や性行動について考えておいて、質問によってはいいチャンスと思って指導にあたりたいと考えるのである。

授業の中でとりつくろったり、逃げてはならないのである。「事実を認め、真実を語ろう」といわれる。この性の研究グループで話し合いをしてきたことで「性」がオープンになったように思える。教師がおたがいに価値観を認めあうためにも、子供たちの性の表情やつまづきをみつけるためにも、私たち自身が子供たちに性を語り、授業にとりくみたい。

また、いろいろなケースから教えられるので、保護者や施設指導員の方々と社会の人と話し合い、研修の場を広めていかなければならない。

ここで、これまでの指導の経過を参考までに記しておく。まだまだ考察を要するところである。

これまでの性指導の経過

- | | | |
|------|-----|----------------------------------|
| 54年度 | 4月 | 障害児と普通児との初潮発来状況調査（特殊教育学校養教部会） |
| | 7月 | 高等部男子のマナー・入浴時（健康相談医西田医師） |
| 55年度 | 7月 | 教官研修「学校における性指導の考え方・すすめ方」講師山口定子教諭 |
| | 8月 | JASE 10回性教育研究大会・京都参加（養護教諭） |
| 56年度 | 4月 | 生理ノート「ヤングメモリー」の使用（個別指導） |
| | 12月 | 中学部女子生徒におけるエチケットマナー |
| | 12月 | 思春期男子のアンケート調査（中3～高3・学級担任） |
| | 6月 | 母親教室「初潮にそなえて」（保健部） |
| | 1月 | 生命「あなたのおへそ」中Ⅱの保健学習（教育実習生） |
| | 2月 | 思春期の生理（中高等部の父母の会） |
| 57年度 | 2月 | 「男の子・女の子」小2組・保健学習（教育実習生） |
| 58年度 | 5月 | 結婚の指導（卒業生個別指導）（副校長・養護教諭） |
| | 8月 | 「清潔面からみた生理の指導」全附連養護教諭研究協議会発表（静岡） |
| | 2月 | 「赤ちゃんのもと」中Ⅱ・保健学習（教育実習生） |
| | 2月 | 「赤ちゃん誕生」 ” ” （養護教諭） |
| | 11月 | 高等部男子の生理・精通現象（生活指導部・養護教諭） |
| 59年度 | 6月 | 結婚の指導（卒業生個別指導） |
| | 11月 | 母親教室「男の子の生理」（保健部） |
| 60年度 | 6月 | ” 「初潮にそなえて」（保健部） |
| | 12月 | 男子の生理・性器の清潔（高等部男子体測時に生活指導部） |

- 61年度 5月 「恥じらいを育てる生理の指導」 県手をつなぐ親の会発表
 8月 J A S E16回性教育研究大会・奈良参加（養護教諭）
 10月 母親教室「性といのち」 ビデオ視聴と話し合い（保健部）
 1月 「体の変化と男女のちがい」中Ⅲ・保健学習（教育実習生）
 1月 「私たちの家族」 小2組 （ " " ）
 1月 「生命の大切さ」 高C （ " " ）
 1月 教官研修「生命と遺伝」講師・川島ひろ子医師（人類遺伝学）
- 62年度 11月 「ぼくの体・わたしの体」中Ⅱ・生活学習（養護教諭）
 12月 「赤ちゃん誕生」 " " （ " " ）
 11月 母親教室「子どもたちへ」ビデオ視聴と話し合い（保健部）
 12月 家庭教育学級「障害児の性の指導」 大下陸郎医師による講話（育友会）
 1月 「わたしたちの成長」 中Ⅰ・保健学習（教育実習生）
 2月 女子のエチケットマナー（中高女子・生活指導部）
- 63年度 4月 「性指導について考える」研究グループ発足
 8月 “人間と性”性教協全国夏期セミナー・金沢大会に参加（4名）
 8月 " " 発表
 9月 教官研修「性の指導について」 講師・大下陸郎医師
 11月 男子の排尿自立状況調査（男子学級担当）
 11月 母親教室「子ども達の性指導について」（研究グループ）
 10月 「生殖のしくみ」 高Hグループ 理科学習（教科担当）
 1 " " （ " " ）
 12月 " " （養護教諭）
 1月 「大人になるってなんだろう」 小3組 （学級担任）

（花本ヨシエ）

4. まとめ

今回、このグループで話し合いを重ね、専門家のお話を聞き、実践をしながら研究をすすめてきた。そこで学び、教えられ感じられたこと（これはあたりまえのことかもしれないが）を述べてまとめとしたい。

はじめに、このグループができた事自体にも一番大きな意義があると思うのであるが、グループによる活動をすすめる中で、指導する側の指導する為の基盤が校内にできつつあるということである。つまり、これまで校内の日常生活の話題の中では、どちらかというマイナーともいえる状態であった性にかかわる話題が、ごくあたり前のこととして話題になり、意見を交換することが多くなった事実。これが、これからの性指導を考え、実践していく上

で当然のことながら大切なことと思われる。そしてまた、グループの一員として、定期的、継続的に話し合う中で、これまで性教育については、遠慮がち、尻ごみする自信のないものでも、考えが深められ、不思議なことに何か自信らしきものがでてきて、子どもや授業に対処できそうに感じられるのである。

つぎに、我々がここにまとめた性指導に関わる内容と実践に関してである。

子どもに応じた指導の内容の吟味については、まだまだこれからというのが正直な所であるが必要なことは、まず理解し得る知識等を教えるという姿勢を持つということである。高等部の「体のしくみと働き・生殖器」の実践での生徒の様子からは、これまで悩み、困っていたことが解消されたことが十分うかがえたことでも、その意を強くするものであった。我々は性について悩んだり、驚かされたりした経験が全くないという人は稀で、それぞれが、何らかの方法で解消してきていると思うのだが、障害児は、生活経験が乏しく友だちとの情報交換がないわけで、我々が解消したようなすべも知恵も（働か）ないのが普通であるので、どうしても教えてやる必要があるのである。そしてこうした学習の積み重ねから、体の悩み、不安について、誰に聞けばよいかということを学んでくれ、そして、相談もしてくれるのではないかと期待もするのである。

そのためには、我々教師は、子どもの悩み、不安から決して逃げない姿勢を持つことが大切であろうし、自由に話を聞いたり、相談にもなる場をもつといった具体的なことも考えてみたいものである。さらにいうならば、性指導であるないにかかわらず、常に子どもたちの理解者たる姿勢を持ち、共感関係のもてる人間をめざしたいし、そうした学校環境を作っていくことが何よりも大事といえるのでなかろうか。教えるべきことは教え、そして、子ども達に悩みや心配事があれば、いつでも相談にのれる教師、学校でありたいものである。

(浦 田 東 作)